

# オトナのための日本語塾

レポート集 2019

武庫川女子大学言語文化研究所 編

## まえがき

この冊子は、武庫川女子大学言語文化研究所による「オトナのための日本語塾」（以下、日本語塾）に参加された“塾生”によるレポート集です。日本語塾は、日本語に関心のある人なら誰でも参加できる会です。現役で働いている人も現役を退いた人も、さらには指導する立場の私も、みんな一緒になって、それぞれの立場からことばについて考えようという主旨の会です。

その会でせっかく考えたのだから、何か記録に残そうということになって出来上がったのが、このレポート集です。年に5回しかない会で考えたり話したりしたことをきっかけとして、何か思いついたことを、大学の授業のレポートを書くような気分で提出してもらっています。

5回しかない日本語塾では、対象としてのことばを料理しようとする、ことばがゆきかいます。思ったことを遠慮せずに発言する。ただし、他人の発言も尊重して理解しようとする。当たり前のように見えて、現実の社会では案外できていないことです。それを塾生も塾長も大事にしようとしています。その精神は日本語塾における学びの対象でもあります。日本語塾は、ことばについて考える場であるとともに、コミュニケーションのためのことばを磨く場でもあるのです。

そうしたトレーニングはきちんとしてくださったのに、残念ながら、レポート提出に至らなかった人もいました。結果として、今回はレポート提出が4人でした。それぞれの人の個性があふれた作品です。ご一読願えればと存じます。そして、興味をお持ちくだされば、ぜひご連絡ください。日本語塾で一緒にできることを期待しています。

塾長 佐竹 秀雄

## 目 次

### まえがき

佐竹 秀雄

### レポート

〈さき〉はなぜ過去も未来も表すのか	上野 和美	3
米菓の食感にかかわる表現	三好 由希子	11
にっこり・にこにこ・にたにた・にやにや	北畠 るり子	19
最近気になることば	竹腰 純	23

## 〈さき〉はなぜ過去も未来も表すのか

上野 和美

### 1. はじめに

「さきの大戦」と言ったとき、〈さき〉は過去を意味する。一方、「さきのこととはわからない」と言うとき〈さき〉は未来を表す。過去と未来という相反する概念を表すにもかかわらず、同じ言葉を使っている。通常、過去を表す〈さき(の)〉は起伏式頭高型のアクセントで、未来を表す〈さき(の)〉は平板式のアクセントで発音され、また、前後の文脈で理解できることから、日常生活で混乱を来すようなことはあまりない。しかし、「大事な今は今だ。さきのことなどどうでもよい」という文では、〈さき〉は過去でも、未来でもどちらに解釈することも可能である。

さらに、もう少し枠を広げ、時間軸に沿って使われる〈さき〉の用法を考えると、過去か未来かというだけでなく順序の〈あと〉〈さき〉の意味も加わって、紛らわしさはいっそう増す。森田(2019)が指摘するように『お風呂は先にしよう』と言ったら、いったい食事前に入浴するのか、まず食事をして入浴は先に延ばすことなのか、定かでない(森田2019:179頁)。「鎌倉時代の一つさきは何時代か」と問われれば、室町時代と答えるべきか、平安時代と答えるべきか、戸惑うことも多いだろう。

日本語母語話者ならともかく、そうではない学習者であれば、聞いて意味を取り違えることもあるだろうし、自身で発音し分けるのもなかなかハードルが高いことだと思われる。

そもそも、なぜ過去も未来も同じ〈さき〉を使うのか。どのようなときに過去を表し、どのようなときに未来を表すのか。順序の〈さき〉もまた同じく〈さき〉という語で表すのはなぜなのか。こうした一連の疑問の答えを探るべく、本レポートでは〈さき〉の本来の意味や使われ方、また、これに関して示されている解釈について考察したい。

### 2. 過去と未来を表す〈さき〉——〈現在〉からの隔たり

まず〈さき〉の付く言葉や表現の主な例を過去か未来かで分類すると、次のようになる。

過去を表す〈さき〉：さきの大戦・さきの副将軍・さきほど・さっき・さきおととい

未来を表す〈さき〉：行くさき・生いさき・老いさき・このさき・さいさき・さきざき・

さきゆき・二年さき・さきを見通す・さきを読む・さきが楽しみ

「さきの大戦」や「さきの副将軍」の〈さき〉は、前回・前任の「前」を意味する。つまり、時間軸に沿って現在よりも一つ前の時点を指す用法だといえる。また、「さきほど」

と「さっき」は、いずれも時間軸に沿って少し前の時点の意味する用法である。「さきおととい」についても同じく、「きょう」「きのう」「おととい」と並んだ時間軸の中で「おととい」の一つ前の時点を表している。これらの用法に見て取れるのは、〈さき〉が時間軸に沿って特定の時点よりも一つ前（あるいは少し前）の時点を表している、ということであろう。

一方、「行くさき」や「生いさき」「老いさき」など、未来を表す〈さき〉についてはどうか。これは時間軸に沿って、現在から見た未来の時点を指している（ただし、過去を示す〈さき〉の場合は「近い過去」を指し示していたのに対して、未来を示す〈さき〉の場合はむしろ「遠い未来」を含意しているように思われる。この点についての考察は一旦置く）。さしあたってここで確認しておきたいのは、〈さき〉が時間の座標軸の中で〈時点としての現在から一定の距離がある〉というニュアンスで捉えられている、ということである。そしてその場合、重要なのは現在からの位置関係それ自体であって、それが時間軸上の過去に位置するのか未来に位置するのかは問題ではない。あくまでも〈時点としての現在〉を起点とした上で、そこから一定の距離があるということ、これが過去・未来を表す〈さき〉の含意となっているように思われる。逆に言えば、だからこそ〈さき〉は過去を示す場合にも未来を示す場合にも使われるのであろう。

### 3. 〈さき〉の意味の広がり——空間から時間へ

そうであれば、〈さき〉が〈時点としての現在〉からの距離感を表すのは、なぜなのか。ここで改めて〈さき〉という語の意味の範疇を考えてみたい。『大辞林』（第二版）では、〈さき〉には次のように記述されている。

- ① 物の先端。出っ張ったところ。はな。「-のとがった棒」「指の-」
- ② 進んで行く一番前。先頭。「-を切って走る」「行列の-」
- ③ 時間的に早いこと。↔あと。「-に出かける」「-に着いた順に並ぶ」
- ④ 順序が前であること。↔あと。「代金を-に払う」
- ⑤ その時よりも前。以前。↔のち。「-に申したとおり」「転ばぬ-の杖」「-の世」
- ⑥ 後につづく部分。後につづく段階。つづき。「早く-を読みたい」「-を急ぐ」
- ⑦ これからあとのこと。将来。前途。行くすえ。「-が思いやられる」「お-まっくらだ」「三年-が楽しみだ」
- ⑧ そこより遠い所。「この-行き止まり」「大阪より-へは行ったことがない」「霧で-〇メートル-も見えない」
- ⑨ 出かけて行く場所。「旅行-」「出張-」「勤め-」
- ⑩ 取引や交渉などをする相手。先方。「-がこわがつて相手にしねへから／安愚楽鍋」
- ⑪ かつて、ある官職にあったこと。前ぜん。多く「さきの」の形で用いる。「-の関白」
- ⑫ 先払い。先駆。「大久米のますら健男を-に立て／万葉集四四六五」

⑬ 第一。まっ先。「おだやかなる思ひをーとすべし／十訓抄」

ここに見られるように〈さき〉には時間的な意味と空間的な意味があるが、どちらが根源的かといえば空間的な意味の方であろう。『古典基礎語辞典』に「物や地形の、前方へ尖って突き出た先端が原義で、「崎」「芒」「鋒」などの漢字を当ててサキとよむ」とあるように、〈さき〉はもともと空間的な意味で使われた、つまり〈先端〉という場所を表したと考えられる。〈先端〉という具体的に目に見える空間的な概念から、〈以前〉〈将来〉などの抽象的な概念を表す語へ。〈さき〉という語はこのように次第に意味用法を広げていったのではないだろうか。

これらのことを踏まえると、〈さき〉が過去であれ未来であれ〈時点としての現在〉からの距離感を表すのは、場所を指す語であった〈さき〉が時間的な概念を指す語にまで応用された結果であるといえる。〈以前〉や〈将来〉は、どちらも〈現在〉から一定の隔たりがあることを示す概念である。過去や未来が時間軸上に位置する特定の地点・場所として捉えられるからこそ、〈さき〉が〈いま（自分の）いる地点から隔たりのあるところ〉と捉えられ、一定の距離感を生じさせることに繋がっているのではないだろうか。

#### 4. 〈さき〉の時間的意味の広がり——過去から未来へ

〈さき〉が過去も未来も指すのであれば、冒頭で述べたような意味の取り違えがもっと頻繁に起こってもよさそうに感じる。音声で伝えるならアクセントに頼ることもできるが、そうでない場面なら誤解は避けられないだろう。しかし、現代日本語において〈さき〉は、過去の意と未来の意との両方を、同じ比重で担っているわけではない。「さきの大戦」「さきの副将軍」というのは、日常会話で使うには少し硬めの古めかしい表現である。やはり未来の意で使われる方が圧倒的に多く、過去を表す用例は限られている。過去か未来か判別しにくいのは「さきの〇〇」に限られ、これ以外はいわゆる未来である。

ところが、〈さき〉が担う時間的な意味について調べると、未来の意は比較的新しい用法であることがわかる。『時代別国語大辞典 上代編』では〈さき〉の意を次のように定義している。

- ① 前方、まえ。隊列などの先頭。
- ② 先ぶれ。使い。サキツカヒに同じ。
- ③ 前の部分。先端。刀剣類についていうことが多い。
- ④ 時間に転用して、以前・既往にいう。

ここで着目すべきは④の「以前・既往」であり、過去の意を専らとしていたという点である。これに関しては「時間を意味する場合、未来を表す用例は見当たらない」と補足の説明までである。

一方、『時代別国語大辞典 室町時代編』で〈さき〉を見ると、語義の三つめに「進行していく事態の、これから展開する時や事柄をさしている」とあり、「出頭衆、遠慮浅くて慇懃なければ、其家の諸人先の考えもなく、遊山にふけり、身をかざり、恥もしらず」（甲陽軍艦）の用例が挙げられている。この「先の」は、どのようなアクセントで読むべきなのかはわからないが、現代日本語における未来の用法と同じである。上代編ではなかった未来の意が、室町時代編では加えられている。

また、『古語大辞典』においても語誌として、

空間的に物の端・先端を意味し、時間的に現在を起点として、すでに経過した辞典を意味した。時間的な未来を意味する用例は、「行くさき」「生ひさき」などの形で平安時代になって現れる。おそらく、空間的前方にひかれて、時間的に前方＝未来の意が生まれたのであろう。

という説明があり、過去の意の方が古いとされている。やはり、時代が下って未来の意が加わったということである。

## 5. 〈さき〉と〈まえ〉との関係——意味の役割分化

前述の『時代別国語大辞典 室町時代編』には、「ロドリゲス大文典」を出典とした次のような記述がある。

「<sup>マエ</sup>前」はただ過去のことを意味し、「サキ」は過去と未来とを意味する。……「前」には「ウシロ」、または「シリエ、ノチ」が対応し、「サキ」には「アト」が対応する。……また、過去形と一緒にあって、過去のことの、未来形と一緒にあって、未来のことの、意を表わす。

〈さき〉が過去も未来も表すことを、〈まえ〉との対比で述べられていることに注目したい。〈まえ〉は〈さき〉と同様、空間から時間へと意味の広がりを見せた語である。もともとは「<sup>まへ</sup>目辺」の意であり、「顔や視線の向いている方向、または場所」を指していたが、そこから「順序の先の方。初めの方」「(時間的に) 現在またはある時点より以前」「さきの、直前の」と意味が広がったのである。時間的な意味において、〈さき〉と共通するところが多い。漢字の「前」は、常用漢字表の訓読みは「まえ」であるが、常用漢字表外には「さき」の読みも存在する。

しかし、〈さき〉とは異なり、〈まえ〉は過ぎた時間(＝過去)しか表さない。「二年まえ」は「二年さかのぼった時」を指し、「まえがある」といえば通常「将来性がある」という意味には解されない。時間の進んでいく方向を見るなら、未来を表す用法へと発展していてもよいように感じるが、そうではない。目の向いている辺りと言いながら、背にした時

間を指す。そう考えると、〈さき〉よりもいっそう不思議な語であるともいえる。

このような語である〈まえ〉が、〈さき〉の意味範疇に関わっているという指摘がある。

『古語大辞典』で名詞「まへ」を見ると、次のような意味が挙げられている。

- ① 目の向いている方。前方。面前。
- ② 家の正面に当たる所。正面の庭。前庭。
- ③ 着物の前の部分。
- ④ 陰部。
- ⑤ 貴人を尊んで、それと指さずにいう語。
- ⑥ 貴人のそば近くにいること。貴人のそばに出仕すること。
- ⑦ 女性の名に付けて敬意を表す語。
- ⑧ (「前神」の意) 二神以上まつる神社で、主神以外の神の称。
- ⑨ 僧侶などの前に供する膳部。
- ⑩ 現在を境にして、それ以前。
- ⑪ 物事の初めの部分。

⑩の「現在を境にして、それ以前」に注目したい。これについては、さらに、次のような説明が加えられている。

⑩は中世以降の用法で、中古の「さき」と同義に用いたのが、「さき」に未来の意の用法が生じたために、それにとって替わる形勢となったようである。

〈さき〉が未来をも表すようになったから、〈まえ〉が過去を担うようになった、というのである。つまり、〈さき〉は、時間的な意味を持つようになり、それはすなわち過去の意であったが、やがて複合語の形で「行くさき」や「生ひさき」のように過去以外のものも表すようになった。すると、複合語でなくても未来を表すようになり、もともと同じように過去を表していた〈まえ〉は、そのまま過去の意を担い続けるという状況になった。そして、担当の区分けが徐々に進み、過去を指す場合に〈さき〉が使われにくくなった——と考えられる。

さらに、同じように過去を表していたのに〈さき〉だけが未来の意を帯びるようになったのは、〈さき〉の方が、進行するものの先端というイメージに結びつきやすかったのだろう。それについては、『古典基礎語辞典』でも「マへ(前)は、目の向いている方向の意で、サキのように直線的に進んでいく意味はないので、これからの将来の意味はない」と説明がなされている。

では、なぜ〈まえ〉は過去の意を、〈さき〉もまずは過去の意を表し、未来が後回しになったのか。それは、〈いま・ここ〉に対置される時間といえ、過去を指すことが当然だっ



たからではないだろうか。未来という概念は過去と比べて新しいものだと思われる。目に見える場所を表す〈さき〉から、時間を表す〈さき〉へと意味が展開したことを思うと、未来・将来といった概念は、抽象度が高く、意味の最終形のように感じる。目に見えるもの→目に見えないけれども確かに存在すると認識できるもの→目に見えなくても存在するはずだと考えられるもの、の順に意味が広がったと想像できる。これは2で、過去を表す〈さき〉は「近い過去」を指し、未来を表す〈さき〉は「遠い未来」を指すと述べたことともつながる。過去のできごとは実体として認識しやすいため、視点のすぐさきに存在する〈直前のもの〉が〈さき〉となりうる。それに対して、未来に起こることは認識不能で、現在との距離も計り知れない。そのために視線が遠く彼方へ及び、〈遙かなるもの〉が〈さき〉となりうる、ということではないか。

## 6. 順序を表す〈さき〉——〈いま・ここ〉からの隔たり

以上のことを踏まえて、ここで改めて順序を示す〈さき〉の用法について考察をしてみたい。この意味での〈さき〉については、次のような表現が例として挙げられる。

順序を表す〈さき〉：おさきにどうぞ・さきに済ませる・さきがける・さきんずる・  
さきばしる・さきをあらそう・さきを越される・ひと足さきに・  
(料金) さき払い

これらの語は、二つ以上のものが存在し、その先後関係を示す表現である。「おさきにどうぞ」は自分があとで、相手がさきということであり、「さきんずる」は、あるものに先行するということである。どれも比較の対象となるものが存在する。この順序関係は、タイミングのあとさきのことであるので時間の意に関わるものと見なせるのだが、同時に、空間的な位置関係と見なすこともできる。それは〈さき〉と〈あと〉が、時の流れを表す一本線の上に存在する二つの地点と捉えられるからである。もともと空間的な〈先端〉を表していた〈さき〉が時間を表す〈さき〉へと意味を広げていったのだとすれば、この順序を表す〈さき〉がそこで一種の橋渡しの役割を果たしていたのではないだろうか。

順序を表す〈さき〉の用法から考えれば、時間的にはじめ(=早い)の方が、時間の進行方向の先方においても矛盾はないといえる。電車でたとえると、先発した電車は、後発の電車よりも、出発地点から遠くまで行っている。出るタイミングの早かった(=〈さき〉に出た)電車の方が、進行方向の〈さき〉にいる。「早い」を「古い・昔・過去」、「遅い」を「新しい」と言い換えれば、「古い・昔・過去」の方が前方に位置し、「新しい」方が後方に位置するということになる。つまり、過去(と認識されるもの)が進みゆくさき(未来)に存在するのである。

『古典基礎語辞典』においても、「先頭や前方に位置することは、早い時期に到達することになるので、早い時期、…する以前、前任などの時間的意味を生じる一方、『行く先』『生

ひ先』のサキなど進んでいく方向の先端、つまり、将来の意味になる」と説明されている。タイミングのあとさきと位置関係の前(=さき)と後ろとがリンクするということである。

2、3で述べたように、〈さき〉は〈時点としての現在〉を起点とした上で、そこから一定の距離があるということを含意していたと思われる。その場合、視線を未来に向けていようが、過去に向けていようが構わない。「現在ではない」、あるいは、「現在と隔たりがある」と認識されれば、それがすなわち〈さき〉なのではないか。〈いま・ここ〉を起点としてそれと距離があるのが〈さき〉であり、〈さき〉は単に、〈いま・ここ〉から視線を延長した〈先端〉を指すという考え方である。昔のことであっても将来のことであっても〈いま・ここ〉ではないことは確かである。だからこそ〈さき〉は、過去と未来とを問わず、〈順序〉を表すことが可能となっているのではないだろうか。

## 7. おわりに

〈さき〉は、「現在の自分のいるところ」ではない「向こうの方、先端」を表す語であり、空間から時間へと意味が広がっていった。しかし、上代では、〈いま〉でない時間といえば昔(=過去)の時間だったので、〈さき〉は過去のみを意味した。のちに、時の流れを線と捉えて進行方向の前方に〈未来・将来〉があると考えられるようになると、〈さき〉は未来の意にも使われるようになった。そして、〈まえ〉に過去の意を託すかのように、〈さき〉は未来の意を主に表すようになっていった——丹念に文献での用例を調べたわけではなく、辞典をたどって、その記述を継いで接いだ推論ではあるが、〈さき〉の意味の持ち場は、このように変わっていったのではないかと思量する。

〈まえ〉との棲み分けが進んだ結果か、現代日本語では、過去を表す〈さき〉は、未来を表す〈さき〉と比べて劣勢である。衰退しつつあると言ってもよい。だからこそ、「さきの大戦」が少し古めかしく、改まった表現のように感じられるのだろう。アクセントが平板にならないのも、過去を表す〈さき〉が少し特殊であるという意識が働くからだと思われる。

以前、日本語学習者に向かって、彼女のポジティブな姿勢を評して「いつも前向きですね」と言ったことがある。過去の失敗にくよくよせず、積極的、発展的にものごとを捉えているという意味で使ったのだが、「前向き？前は ago の意味で過去を指すのではないのか？」と聞かれ、答えに窮した。うまく説明できずに、学習者を混乱させてしまった。まさに私にとっての「過去の失敗」である。

基本的な語ほど意味が広がり、変化していく。さまざまな現象が混ざり合って、現代日本語での使われ方に至っているのだから、「なぜ、こうなった？」という疑問に一つの解を求めるのは土台無理なことである。

今回調べた〈さき〉についても、過去か未来かという時制の〈さき〉と、順序のあとさきの〈さき〉との関係はおよそ明らかにはできていない。〈さき〉の紛らわしさの原因はこ

ここにそあるように感じるのだが、基本語であるだけに調べがつかなかった。

言葉の源をたどるのは無理なことだと承知している。しかし、気にかかり、つい追い求めてしまう。それには、日本語の習得について考えたとき、語の意味を分析的に捉えて、Aの意味もある、Bの意味もある、と羅列で覚えるのでは、学習者にとって負担が大きいと感じるからでもある。コアなイメージをつかんでいれば、効率的に語が獲得できる（但し、その説明をどの言語で行うのか、どの段階ですべきか、という問題は残るのだが）。

日本語学習の手助けをする母語話者として、たとえすっきりとした答えにたどり着けなくても、語のコアイメージや意味の変遷に心を寄せることは続けていきたい。そうすれば、少なくとも何が誤解や混乱の素になるのかについて承知しておくことはできると思う。

#### 〈参考文献〉

大野晋編『古典基礎語辞典』角川学芸出版，2012年

澤瀉久孝ほか『時代別国語大辞典 上代編』三省堂，2000年

土井忠生ほか編『時代別国語大辞典 室町時代編三』三省堂，1994年

中田祝夫ほか編『古語大辞典』小学館，1989年

松村明編『大辞林〔第二版〕』三省堂，1995年

森田良行『日本語をみかく小辞典』角川ソフィア文庫，2019年

# 米菓の食感にかかわる表現

三 好 由 希 子

## 1. 調査の動機とねらい

最近、おかきやおせんべいが美味しいと感じるようになった。今までおかきやおせんべいは、家に常備されているものであり、自分でパッケージを見て選んだことはほとんどなかった。しかし、パッケージには原材料名や賞味期限など重要な情報が書かれているし、何よりその商品に関する特徴や魅力を表す文句が書かれている。

そのような言葉のうち、私が気になったのは食感にかかわる表現である。食感にかかわる表現こそが、その商品の魅力を最も強く伝えて、消費者の購買欲を刺激するものだと考えられる。

食感にかかわる表現を見てみると、オノマトペが多いように思われるが、実際にオノマトペが多いのだろうか。そして本当に多いとしたら、なぜ多いのだろうか。また、オノマトペ以外にどのような表現が使われているのだろうか。そこには、どんな特徴や表現の工夫があるのだろうか。

このような疑問を解決するために、おかきやおせんべいのパッケージに書かれている、食感に関する表現を実際に調べてみたいと考えた。どのような表現の特徴が多いのか、そこにどのような意味が考えられるのか。それを明らかにするのが、このレポートのねらいである。

## 2. 調査の方法

おかきやおせんべいはお米から作られているが、これを総称して米菓と言う。もち米を原料とする米菓を一般的には「あられ」「おかき」と呼び、うるち米（私たちが普段食べているお米はこちら）を原料とする米菓を「おせんべい」と呼ぶ。これらの米菓のパッケージにおける記述から、食感に関する表現を採集して分析する。

調査の対象にしたものは、スーパーマーケットでよく売られている一般的な袋入りの菓子である。菓子のうち、パッケージの裏面に「名称、米菓」と書いてあるものに限った。また、選ぶ際に、同じ会社ばかりや、同じタイプばかりにならないようにしたが、あえて特殊な味のものを選ぶことはせず、定番の人気商品を中心にした。その結果、20 商品を選ぶことになった。

パッケージから食感を表す表現を採集したが、その際、食感を表現すると判断できる語句を抽出した。ここで食感というのは、歯で噛んだときの噛みごたえを中心にとらえている。したがって、「甘い」「からい」などの味は採集の対象から除いている。

商品によっては、パッケージの表面と裏面に、全く同じフレーズが2回以上登場するも

のがあった。例えば、「いつでもカリッと！」のようなキャッチフレーズになる表現と思われる場合である。このような表現の重複は、合わせて1回の出現としてカウントした。ただし、「ミルク感」については、「ミルク感・くちどけ感アップ」と「濃厚なミルク感のあるあまじょっぱい味わい」と異なる文脈で出現していたため、別のものとして2回に数えた。

また、「香ばしい」は「香ばしい風味」という形で使われていた。「香ばしい」も口の中で感じるとみなせるが、食感というより味に近いものと認定して対象に含めなかった。似たようなものに「こんがり」があったが、「こんがり」は、「こんがりさくさく」の文脈で使われている場合は食感表現としたが、「こんがり香ばしい」の文脈で使われている場合は香ばしいにかかるため食感表現として扱わなかった。

そのほか、「まろやかな生しょうゆ」の「まろやか」は、米菓ではなく生しょうゆを説明するものなので、食感表現に含めなかった。また、「たっぷり黒豆の香ばしき」の「たっぷり」と「香ばしき」についても、黒豆を説明していると考えられるため、食感表現として扱わなかった。

以上のようにして採集した表現は、すべてで28種類、54個であった。

### 3. 調査の結果

#### 3-1 よく使われる表現

54個の表現のうち、どのような語句がよく使われていたのか。度数順に並べると表1のようになる。

表1. 食感表現の使用度数順表

順位	食感表現	度数	比率 (%)
1	カリッと	6	11.1
2	サクサク (と)	5	9.3
3	サクッと	4	7.4
3	ソフト (な・に)	4	7.4
5	カラッと	3	5.6
5	つぶつぶ (つと)	3	5.6
5	やわらか (な・い)	3	5.6
5	くちどけのよ (い・さ)	3	5.6
9	ほろほろ	2	3.7
9	はもろ (い・さ)	2	3.7
9	ミルク感	2	3.7

注) カッコ内は、その文字が追加された場合を含むことを示す。

表1で多かったものを見ると、1位が「カリッと」で、その後に「サクサク（と）」「サクッと」と続く。これらはいずれもオノマトペであり、3種を合わせると3割近くを占める。米菓の食感表現としては、いわば「カリ」「サク」の音が非常に多いことになる。さらに、5位には「カラッと」「つぶつぶ（つと）」、9位には「ほろほろ」というオノマトペが出現している。これらのことから、やはりオノマトペが中心的な存在であることが確かめられる。

オノマトペの多さとその他の表現の実情を見るために、表現の性質別の度数表を作成した。それが表2である。

表2 食感表現の種類別使用度数表

タイプ	型	食感表現（数字は度数2以上の場合）	種類／度数
副詞(オノマトペ)	○×○×	サクサク（と）5 つぶつぶ（つと）3 ほろほろ2 パリパリ、もちもち	5/12
	○×ッと	カリッと6 サクッと4 カラッと3 パリッと	4/14
	○っ×り（と）	しっとり	1/1
	○ん×り	こんがり	1/1
形容詞・形容動詞		ソフト（な・に）4 やわらか（な・い）3 はもろ（い・さ）2 軽快な、濃厚な、軽やか 軽い、こちよい くちどけなめらか	9/15
名詞		ミルク感2 粒の、くちどけ感	3/4
句		くちどけのよ（い・さ）3 かみしめるような 歯ざわりのよい 歯ごたえのある 食べごたえのある	5/7

表 2 において、副詞はすべてオノマトペであり、11 種類のものが認められ、回数では 28 度出現していた。食感表現の全体は、すでに述べたように、28 種類で全度数 54 なので、種類では 39.3%、度数では 51.9%がオノマトペであったことになる。種類においても度数においても、オノマトペが非常に多くを占めていることがわかる。

畑中 (2019) には

日本語は、食感を表現する言葉の数が非常に多い言語でもある。食品総合研究所の調査では、445 語もあることがわかった。… (略) …特筆すべきは、445 語の約 7 割が、オノマトペだったことだ。

と述べられている。445 語の 7 割とは 300 語以上に上る計算になる。それに比べて、今回の調査ではオノマトペは 11 種類に過ぎない。食感を表現するオノマトペの多さからすると、米菓の食感を伝えるには、思ったよりも限られた種類のオノマトペしか使われていないことになる。

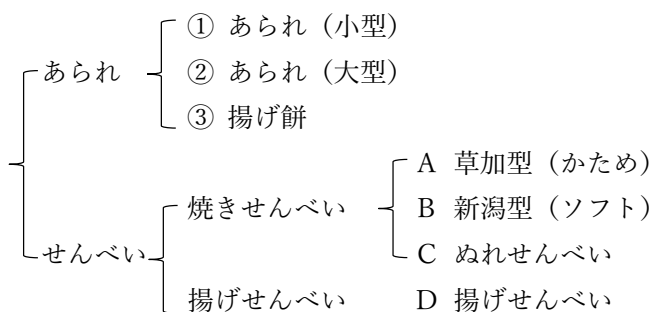
表 1 の個々の表現の上位 3 つの「カリ」、「サク」系に、5 位の「カラッと」を加えると、「カラ・カリ・サク」という心地よく歯で噛み切る音、いわば、歯ざわりの良い印象を与える音が上位を占めると言えよう。

オノマトペ以外では、形容詞・形容動詞という形容語が 9 種類、15 度出現している。また、「くちどけのよい」「歯ごたえのある」のような句形式の説明も認められた。そして、「ミルク感」「くちどけ感」のような流行語を取り入れた表現も見られた。

他方、意味の点から表現を見直すと、「ソフト」「やわらか」が合わせて 7 度出現していることが注目される。その他、「くちどけ」にからむ表現も 5 度、さらに「軽い」「軽やか」「軽快」といった「軽い」系の存在も好まれるようである。

### 3-2 種類による違い

米菓は、その種類によって、大きく「あられ」と「せんべい」に分けることができ、さらに、細かく次のように分類することができる。



この分類①～③およびA～Dに合わせて、すべての食感表現をタイプごとに調べた。それを整理したものが、次の表 3 である。

表3 米菓の種類と食感表現

米菓の種類	食感表現（数字は2以上の度数）	種類／度数
①あられ（小型）	カリッと4、サクッと、パリッと、つぶつぶ、ほろほろ、軽快な、粒の、はもろ（い・き）	8／12
②あられ（大型）	カリッと、サクッと、ほろほろ、ソフトな	4／4
③揚げ餅	サクサク、つぶつぶっと	2／2
A 草加型焼きせんべい	歯ごたえのある、歯ざわりのよい、かみしめるような	3／3
B 新潟型焼きせんべい	カリッと、サクサク3、サクッと、パリパリ、こんがり、軽い、やわらかい、ソフト（な）、くちどけなめらか、くちどけのよ（い・き2）、くちどけ感、ミルク感2、濃厚な	13／19
C ぬれせんべい	もちもち、しっとり、やわらかな、食べごたえのある	4／4
D 揚げせんべい	カラッと3、サクサクと、サクッと、つぶつぶ、こちよい、軽やか、ソフトに、やわらか	8／10

この表から、食感表現が最も多く使われているのは「B 新潟型焼きせんべい」で、それに「①あられ（小型）」「D 揚げせんべい」と続いている。

また、「A 草加型焼きせんべい」が、「歯ごたえのある」「歯ざわりのよい」「かみしめるような」のような説明的な表現ばかりであることも注目される。説明的な表現は、ほかに「B 新潟型焼きせんべい」「C ぬれせんべい」にも使われている。このような表現は、「カリッと」や「サクサク」のようなオノマトペでは表現しきれない食感であるために使われているのではないと思われる。

試しに、オノマトペに置き換えてみよう。

「歯ごたえのある」「食べごたえのある」→ボリボリ、ガリガリ

「かみしめるような」→ボリボリ、ガリガリ、ギシギシ

「歯ざわりのよい」→バリバリ、ザクザク

「くちどけのよい」→？

「くちどけのよい」については、ぴったりのオノマトペが見つからない。早川（2006）によると、

驚いたことに、この「口どけ」という言葉は、新しい表現なのです。…（中略）…現在も、『広辞苑』には「口あたり」「口ざわり」「舌ざわり」などの記載はありますが、「口どけ」は載っていません。

とある。つまり、「くちどけのよい」自体が新しい食感表現のようだ。

また、置き換えたオノマトペを見ると、濁音を使っていることもあって、心地良く噛み切る米菓のイメージからは少し離れてしまうように思う。そのようなことから、これら



のオノマトペを使用せず、あえて説明的な言葉にして良いイメージを与えていると思われる。

ところで、食感表現で多かったベスト4は「カリッと」「サクサク(と)」「サクッと」「ソフト(な・に)」であった。これらは「カリ系」、「サク系」、「ソフト系」の3種にまとめられるが、これらの表現は、米菓の種類によって使われ方が異なるのだろうか。その結果をまとめたのが次の表4である。なお、「カリ系」、「サク系」、「ソフト系」には、次のように、ベスト4以外の表現を含めている。

カリ系：カリッと、カラッと

サク系：サクッと、サクサク、サクサクと

ソフト系：ソフト、ソフトな、ソフトに、やわらか、やわらかい、やわらかな

表4 米菓の種類と食感表現

米菓の種類	カリ系	サク系	ソフト系
①あられ(小型)	カリッと4	サクッと	
②あられ(大型)	カリッと	サクッと	ソフトな
③揚げ餅		サクサク	
A草加型焼きせんべい			
B新潟型焼きせんべい	カリッと	サクサク3、サクッと	ソフト、ソフトな やわらかい
Cぬれせんべい			やわらかな
D揚げせんべい	カラッと3	サクサクと、サクッと	ソフトに、やわらか

「カリ系」、「サク系」、「ソフト系」をすべて強く打ち出しているのは、「B新潟型焼きせんべい」である。サクッととしてソフトであり、カリッと歯切れのよいイメージである。これに続いて、「カリ系」、「サク系」、「ソフト系」が多いのは「D揚げせんべい」「②あられ(大型)」である。

一方、「A草加型焼きせんべい」にはいずれも出現していない。つまり、米菓でよく使われている食感を表に打ち出していないことになる。

### 3-3 会社による違い

次に、会社別の違いがあるかどうかを調べた。上に述べてきた結果を踏まえて、「カリ系」、「サク系」、「ソフト系」のほかに、次の「つぶ系」と「くちどけ系」も立てて整理した。その結果を表5に示す。

つぶ系：つぶつぶ、つぶつぶと、粒の

くちどけ系：くちどけ感、くちどけのよい、くちどけのよさ、くちどけなめらか

表5 会社別の食感表現

会社名	商品数	カリ系	サク系	ソフト系	つぶ系	くちどけ系	その他	計
イオン	1		1	1				2
岩塚製菓	6	2	1	2		3	9	17
亀田製菓	7	5	4		2		5	16
栗山米菓	2	2	1	2	1		1	7
三幸製菓	3		1	2		2	5	10
ぼんち	1		1		1			2
	20	9	9	7	4	5	20	54

会社別に見ると、岩塚製菓はいろいろな系統の食感表現を使っている。また、栗山米菓も商品数2なのに、さまざまな系統の食感表現を使っている。それに対して、亀田製菓は商品数7で表現数も多いが、「カリ系」「サク系」だけで半数を超えている。

食感表現の系統で言うと、「サク系」はどの会社にもあるが、ほかの表現は、会社による違いがありそうである。例えば、「くちどけ系」は岩塚製菓と三幸製菓だけである。

こうしたことから、「サク系」は米菓では外せない食感表現だと思われる。

#### 4. おわりに

今回の調査でオノマトペは実際に多いことがわかった。採集した食感に関する表現 54 個のうち、オノマトペは 28 個あり全体の半数以上であった。

なぜ多いのか。それはオノマトペには人の直感に訴える力があるからだと思われる。例えば「カリッ」の場合を想像してみる。

消費者の M さんがスーパーで米菓コーナーに行った

↓

パッケージの「カリッと」という文字を見る

↓

M さんは、頭の中で「カリッ」をイメージする (M さんが米菓を歯で噛んで、米菓が折れたり砕けたりしているリズムカルで心地よい音や歯ざわりを・・・)

↓

M さんは思う (その歯ざわりを体験してみたい、きっとおいしいに違いないと)

「カリッと」を見ただけで、ここまで想像してしまう。それがオノマトペの直感に訴える力であり、その力があるからこそ食感表現に使われている理由だと思う。早川 (2006) にも「擬音語・擬態語は、一秒に満たないような瞬間の感覚を、微妙なニュアンスまで表す際に便利です。」とある。

また、オノマトペ以外では、「くちどけのよい」「歯ごたえのある」などの表現があった。特徴としては説明的な句形式である。オノマトペでは表現しきれない食感について、「こん

な食感が楽しめるよ」とアピールしている。オノマトペが直感に訴える食感だとすれば、この句形式はかみ砕いていくことでだんだんと感じられる、じっくり味わうことで感じられる食感を表していると思う。その、時間が経つにつれて感じられる食感を、良いイメージを伴って簡潔に説明する工夫がされている。

米菓は歯ざわりを楽しむためのお菓子だ。「カリ系」と「サク系」の食感が特に好まれており、ほかに「ソフト系」「つぶ系」「くちどけ系」も好まれている。米菓のパッケージには米菓の一番の魅力であるそれらの「食感」を伝え、購買欲を刺激するために、オノマトペや句形式の表現を駆使していると考えられる。

商品の発売年と食感に関する表現の関係については、今回は調べていない。しかし、発売当初のパッケージには表現は無くても、現在はあるものも見つかっている。そして、発売年が最近のものほど表現の数が多いようにも思う。これについて、また調べてみたいと思っている。

この調査が始まって、お菓子売り場によく行くようになった。パッケージの「カリッ」「サクッ」という表現を見つけては、声に出し、調査の対象商品を選んだ。ちょっと変なお客さんだったと思う。

#### 〈参考文献〉

山口仲美編（2003）『暮らしのことば擬音・擬態語辞典』 講談社

早川文代（2004）『食語のひとつとき』 毎日新聞社

早川文代（2006）『食べる日本語』 毎日新聞社

畑中三応子（2019）「口福の源 食料」 全国政懇協議会事務局 政経週報 2019年9月9日号

# にっこり・にこにこ・にたにた・にやにや

北 島 る り 子

## 1. はじめに

昨今、「人生100年時代」と言われている。そうした長寿を健康に生き抜くためには「笑い」が大切だと言われることがある。確かにその通りだと思うが、笑いにもさまざまなものがある。大きな口を開けての笑いもあれば微笑もある。あるいは、冷笑と呼ばれるものも笑いの一つであろう。

多くの笑いのなかで「にっこり」や「にこにこ」は好ましい笑いであることは間違いないだろう。その好ましい「にっこり」「にこにこ」に、音声的に似た表現として「にたにた」「にやにや」がある。これらはどのようなところに共通点があり、どのような点で異なっているのかについて調べてみようと考えた。

## 2. 「にっこり」「にこにこ」「にたにた」「にやにや」の違い

まず、一般的な国語辞典と擬音・擬態語辞典でどのように取り扱われているか調べてみた。国語辞典には『新明解国語辞典』（第二版）を、擬音・擬態語辞典には『くらしのことは擬音・擬態語辞典』を利用した。

以下、それぞれの引用を示す。

### ○「にっこり」

#### A 国語辞典

いかにもうれしいという気持ちを顔に表す様子。「一笑う」

#### B 擬音・擬態語辞典

声を立てずに、嬉しそうな笑顔を浮かべる様子。「老婦人が私たちの会話に耳をそばだてにっこりとほほ笑んだ」（日本経済新聞 00・12・20）

【類義語】「にっこ」「にっこにこ」

「にっこ」は「にっこり」とともに室町時代から見られ、同じ様子を表すが、現代では古めかしい表現である。

「にっこりする」とはいうが、「にっこする」とはいえないなど、用法も狭い。「にっこにっこ」は満面に微笑みを浮かべる様子。

### ○「にこにこ」

#### A 国語辞典

笑いを浮かべた、うれしそうな様子。「一顔」

#### B 擬音・擬態語辞典

人がうれしそうに微笑んでいる様子。「弟のほうは遊んでもらえると勘違いしてニコニコすると」(朝日新聞 00・12・7)

鎌倉時代から見られる語。それ以前は、「にここ」という語が「にこにこ」の意味を表した。「面を見れば、にこにこ咲(ゑ)むで宣(のたま)はく」(今昔物語集)

【類義語】「にこ」「にこっ」「にこり」

「にこにこ」は微笑みが反復されたり長く続いたりするのに対し、「にこ」「にこっ」「にこり」は、微笑みが一回的で短時間である時に使う。

○「にたにた」

A 国語辞典

うす気味悪い顔をして笑う様子。

B 擬音・擬態語辞典

①声を立てずに、良からぬ下心のありそうな薄笑いを、顔一面にへばりつかせるように浮かべる様子。いやらしさや気味悪さを伴う表現である。「見張りの男は、ちょっとニタニタし始めた」(宮部みゆき『天狗風』)。また「にたにた」と笑うことを「にたにた笑い」といい、小説などで、悪巧みの成功しそうな人物が思わず笑みを浮かべてしまう場面で多く用いられる。「抑えつけても抑えつけても、溢れ出すようなニタニタ笑いを、顔一杯にみなぎらせながら」(江戸川乱歩『二銭銅貨』)

②物が粘りつく様子。ただし、現代ではほとんど用いず、「にちゃにちゃ」を用いるのが普通。「脂じみた雲脂(ふけ)が一ぱいにたまってにたにたする」(鈴木三重吉『小鳥の巣』)

【類義語】「にこにこ」「にやにや」

「にこにこ」「にやにや」は声を出さずに笑い顔になっている点では、「にたにた」と同じだが、「にたにた」がいやらしきや気味の悪さを伴うのに対して、「にこにこ」は嬉しそうな明るい笑い方を表す。「にやにや」もいやらしい感じを伴うが、「にたにた」ほど気味悪くはない。

○「にやにや」

A 国語辞典

(おかしかったことなどを思い出して)ひとりで、笑い顔をする様子。(言いたいことを言わないで)意味ありげな顔をする様子。

B 擬音・擬態語辞典

声を出さずに、薄笑いを浮かべている様子。自分にとって有利なことや愉快的ことを密かに考えている場合に用い、他人から見るといやらしさを伴う笑い方を表す。「竜司はさもおかしそうにニヤニヤしている」(鈴木光司『リング』)

鎌倉時代から見られるが、当時は物が粘りつく様子を表した。「にやにや」笑うことを意

味する「にやつく」も本来は粘りつくことを表す語だった。また、現代語の「にやつく」の類義語である「にやける」は本来は男性に関わる語で、男性が女性のように艶っぽくふるまうことを表した。「にやにや」「にやつく」「にやける」が薄笑いを浮かべる様子を表すようになるのは、明治時代以降である。

【類義語】「にやっ」「にやーっ」

「にやっ」は瞬間的に薄笑いを浮かべる様子。「にやーっ」は「にやっ」に比べて、薄笑いの表情がゆっくり顔全体に広がる感じがある。

### 3. 共通点や類似点

擬音・擬態語辞典では、「にっこり」「にたにた」について「声を立てずに」と述べられ、「にやにや」については「声を出さずに」とある。また、「にたにた」の項で類義語の説明として、「にこにこ」「にやにや」は声を出さずに笑い顔になっている点では「にたにた」と同じ」という記述がある。以上のことから、「にっこり」「にこにこ」「にたにた」「にやにや」は声を出さない点で共通する。

また、「にっこり」と「にこにこ」については、国語辞典と擬音・擬態語辞典の両方で「うれしいという気持ち」「嬉しそうな笑顔」「うれしそうに微笑んでいる」という表現が見られる。このことは「にっこり」と「にこにこ」はよく似た意味であることを示している。

他方、「にたにた」については、国語辞典で「うす気味悪い顔をして笑う」、擬音・擬態語辞典で「薄笑い」「いやらしさや気味悪さを伴う」という表現が見られる。「にやにや」については、擬音・擬態語辞典で「薄笑い」「いやらしさを伴う」という表現が見られる。これらから、「にたにた」と「にやにや」の共通性が確認できる。

以上をまとめると、4つの語は「声を立てずに笑う様子」という点で共通し、その中で「にっこり」と「にこにこ」とが意味が近く、「にたにた」と「にやにや」とが意味が近いと言える。

### 4. 異なる点

では、意味の近い「にっこり」と「にこにこ」は、どこが異なるのであろうか。また、同様に意味が近い「にたにた」と「にやにや」はどのような点で異なっているのだろうか。

まず、「にっこり」と「にこにこ」について考えてみる。

(1) a 彼女は久しぶりに帰郷して母親の顔を見た瞬間にっこりした。

b 彼女は久しぶりに帰郷して母親の顔を見た瞬間にこにこした。

(2) a 彼は、会うといつもにっこりしている。

b 彼は、会うといつもにこにこしている。

上の用例を見ると、(1)に関しては「にっこり」がよりふさわしく、(2)に関しては「にっこり」は不自然で「にこにこ」がピッタリである。両者の違いは、(1)が「母親の顔を見た瞬間」という一時的な行為を描写しているのに対して、(2)が「会うといつも〇〇している」

という継続的な行為を動作であることだ。つまり、「にっこり」は微笑みの瞬間を示すのにふさわしく、「にこにこ」は一瞬ではなく継続して、あるいは、連続して微笑んでいるようすを表すのに適しているという違いがある。

次に、「にたにた」と「にやにや」について考える。

(3) a 男は、隣に座った女性の体を眺めてにたにたし始めた。

b 男は、隣に座った女性の体を眺めてにやにやし始めた。

aの場合、「にたにた」には、男が女性に対してよからぬことを考えているような、下卑たイメージが感じられる。それに対して、bの場合は、aと同じような解釈もできなくはないが、それ以外に、うれしいと思っている、いわゆる「鼻の下を伸ばしている」という解釈も可能である。「にたにた」のほうが「にやにや」よりも薄気味悪さ、いやらしさが強い傾向がある。

(4) a 兄は、弟と遊んだ昔のことを思い出して、楽しそうににたにたしている。

b 兄は、弟と遊んだ昔のことを思い出して、楽しそうににやにやしている。

これは、兄が弟と楽しく遊んだ昔のことを思い出している場面である。この場合はaの「にたにた」よりもbの「にやにや」のほうが適切であろう。楽しいシーンを思い出した笑いには、「にたにた」は合わないのである。

以上のことから「にたにた」はいやらしさや気味悪さを伴う表現であり、「にやにや」もいやらしい感じを伴うこともあるが「にたにた」ほど気味悪くはなく、時にはうれしさや楽しさを表す場合にも使える。

## 5. まとめ

「にっこり」「にこにこ」「にたにた」「にやにや」は、すべて声をださない点では共通している。しかし、笑いの示す意味で、「にっこり、にこにこ」と「にたにた、にやにや」の2つのグループに分けられる。

「にっこり」と「にこにこ」の表現は、うれしそうな笑顔や微笑んでいるといった共通した意味をもっている。そして「にっこり」が瞬間的な笑顔であるのに対して、「にこにこ」は継続的な笑顔を表すという違いが認められる。

「にたにた」と「にやにや」は、一般的には薄笑いや気味の悪さを伴う笑いという点で共通するが、「にたにた」の方がより気味の悪さやいやらしい印象が強く、「にやにや」はうれしさや楽しさを表す場合もありうる。

笑いのうちの「にっこり・にこにこ・にたにた・にやにや」というオノマトペの使い方に疑問をもったことから、それらの意味や用法を調べた。

まず、それぞれの意味を理解し、さらに各々の表現を文章で使われている時の意味を含めて自分自身の中で整理することができた。今回は特にことば(表現)の意味を深く感じとることができたと思われる。今後いろいろとより深く言葉の表現について意味を追求していきたい。

# 最近気になることば

竹 腰 純

## 1. はじめに

平成 23 年（2011 年）に LC 倶楽部に入会し、その後「オトナのための日本語塾」に参加、佐竹先生、岸本先生のご指導のもと、今回提出するレポートが 5 作目になる。その間に日本語に対する関心が高まり、新聞やテレビ、日常会話で使用されている日本語について疑問に思うことが増えてきた。今回は過去 4 作のレポートで調べたことも含め、最近気になることばを取り上げてみた。

## 2. 気になることば

### 2-1 処方せん

年齢を重ねるとともに、掛かり付け医の診察を受けることが増え、診察後「処方箋」を持って医院近くの薬局に行くことが多くなってきた。薬局の看板は大半が「処方箋」ではなく「処方せん」となっている。「箋」の字は 2010 年の常用漢字改訂時に追加された 196 字の一つである。

常用漢字とは、「法令、公用文書、新聞、雑誌、放送など、一般の社会生活において、現代の国語を書き表す場合の漢字使用の目安」として内閣告示「常用漢字表」で示された現代日本における日本語の漢字で、法令、公用文書はもちろん、マスコミも常用漢字表に沿った表記をしている。

2010 年に追加された常用漢字 196 字は、都道府県の表記に影響する漢字（鹿、熊、岡、媛、阪、奈、阜、梨、埼、栃、茨）、医療関係の漢字（潰、瘍、腫、脊、椎、梗、塞、咽、喉、腎、骸、蓋、唾、腺、顎、斑、鬱、痕、捻、挫、箋）、身体に関する漢字（膝、肘、股、脇、頬、爪、眉、尻、喉、）、衣食住に関する漢字（袖、裾、箸、鍋、串、井、麵、膳、餅、煎、呂、枕、鍵、巾）が中心である。これにより鹿児島、熊本、福岡、愛媛、岡山、大阪、奈良、岐阜、静岡、山梨、埼玉、栃木、茨城が常用で表記ができるようになり、胃潰瘍、脳腫瘍、脊椎、脳梗塞、耳鼻咽喉科、腎臓、骸骨、頭蓋骨、唾液、乳腺、鬱病、捻挫なども常用で表記出来るようになった。さらにこの改定で、破たん、隠ぺい、語い、軽べつ、戦りつ、ざん新、ち密、どん欲などの交ぜ書きがなくなり、破綻、隠蔽、語彙、軽蔑、戦慄、斬新、緻密、食欲と常用表記できるようになった。

「何故処方せんとひらがなになっているのですか？」と複数の薬局で聞いてみた。「遠くから見て漢字より分かり易いからでしょ」といずれも同じ答えが返ってきた。公用文書やマスコミに対する一つの基準である常用漢字は、分かり易さを優先する看板には不向きなようだ。「耳鼻いんこう科」「皮ふ科」「くすり」「はしご車」「防火水そう」「たばこ」など、



ひらがなが入った看板をよく目にするのはそのためだ。「こどもの安全！直ぐ110番」「ちかんに注意！すぐ110番」などの注意を促す看板はその最たるものと理解した。

レポート第3号「漢字の歎き」で交ぜ書きの分かりにくさを書いたが、「ひらがな」を入れてあえて交ぜ書きにすることにより、分かり易くなることがあると分かった。「処方せん」の看板を見て「処方せず」と誤解する人はいない。仮にいてもその人物に処方する薬はないであろう。

## 2-2. 母校

レポート第4号では「高校野球と校歌」について書いた。「校歌」を辞書（大辞林第三版）でひくと「その学校の教育理念や校風などを内容とし、学校で制定して、生徒たちに歌わせる歌」とある。その校歌に「母校」が登場するのは調査した86校のうち、北照、八戸光星、聖光学院、作新学院、前橋育英、浦和学院、習志野、中央学院、法政二、常葉菊川、愛産大三河、東海大相模、佐久長聖、敦賀気比、明星、浪商、智辯和歌山、鳥取城北、高知、折尾愛真、佐賀商、熊本星翔の22校であった。

「母校」について辞書を見ると、「広辞苑」第七版（2018年）には「自分が学んで卒業した学校。出身校」とあり、「新明解国語辞典」第七版（2016年）にも「自分がそこで学び、卒業した学校。出身校」とある。ところが、一方「大辞林」では、第二版（1995年）から第四版（2019年）まで、「その人が学び卒業した学校。出身校。また、在学している学校」とある。また、「三省堂国語辞典」第三版（1985年）には、すでに「①自分の卒業した学校。②自分の在学している学校。」という語釈があり（用例は省略した）、第七版（2014年）にも同じ語釈が載っている。「在学している学校」の意味も認めている。さらに、「言泉」（1986年）に至っては、「自分が在学している学校。また、卒業した学校。出身校。」と「在学している学校」の意味が先に述べられている。同様の例は、「明鏡国語辞典」第二版（2010年）で「自分が学んでいる学校。また、自分が学んで卒業した学校。出身校。」を挙げることができる。

自分の経験で「母校」を在学中の学校の意で使用したことはなく不思議に思ったので調べてみることにした。今回は高校球児の多くが進学する、関東と関西の大学野球連盟に加入している大学の校歌を調べてみた。

東京六大学野球連盟（慶應・法政・早稲田・明治・東大）の中で「母校」が出てくるのは法政、早稲田、明治、立教の4大学であった。

### ★法政大学【昭和6年（1931年）制定】

作詞：佐藤春夫《明治25年4月9日生》 作曲：近衛秀麿

「ここに捧げて 愛する母校（一番・二番）」

「法政 おお わが母校 法政 おお 我が母校（一番・二番）」

### ★早稲田大学【明治40年（1907年）制定】

作詞：相馬御風《明治2年6月6日生》 作曲：東儀鉄笛

「都の西北 早稲田の森に 聳ゆる薨は われらが母校 (一番)」

「あれ見よかしこの 常磐の森は 心のふるさと われらが母校 (二番)」

★明治大学【大正9年(1920年)制定】

作詞：児玉花外《明治7年7月7日生》 作曲：山田耕作

「明治その名ぞ吾等が母校 明治その名ぞ 我等が母校 (一番)」

★立教大学【昭和元年(1926年)制定】

作詞：諸星寅一 作曲：島崎赤太郎

「紫匂える武蔵野原に いかしくそばたつ 我等が母校 (一番)」

「朝に夕べに鍛えつ練りつ 邦家に捧ぐる 我等が母校 (二番)」

「東西文化の粹美をこらし 栄光輝く 我等が母校 (三番)」

東都大学野球連盟所属 20 大学 (中央・亜細亜・國學院・立正・東洋・駒澤、拓大・青学・専修・日大・国士館・東農大、大正・順天堂・学習院・芝工大・成蹊・上智、都市大・一橋・東工大) の中では青学、順天堂、芝工大、成蹊、都市大、一橋の 6 大学であった。

★青山学院大学

作詞：大木金次郎《明治37年8月3日生》 作曲：平岡精二、

「こだまする チャイムの響き わが母校 青山学院 (一番)」

「こだまする 正義の叫び わが母校 青山学院 (二番)」

★順天堂大学

作詞：宮澤隆治 作曲：間紀徹

「光荣ある歴史に 輝く母校 (一番)」

「誠の力に 溢るる母校 (二番)」

「尊き使命に 伸びゆく母校 (三番)」

★芝浦工業大学【昭和16年(1941年)制定】

作詞：北原白秋《明治18年1月25日生》 作曲：山田耕筰

「芝浦 芝浦 われらが母校 (一番・二番・三番)」

★成蹊大学【昭和2年(1926年)制定】

作詞：志田義秀《明治9年7月27日生》 作曲：信時潔

「宇 (いえ) は大なり 母校 成蹊の宇」

★東京都市大学【昭和8年(1933年)制定】

作詞：相馬御風《明治16年7月10日生》 作曲：山田耕筰

「日に日に栄行く われらが母校 (三番)」

★一橋大学

作詞：银杏会同人 作曲：山田耕筰

「自由の殿堂われらが母校 一ツ橋 一ツ橋 あゝ あゝ われらが母校 (一番)」

「理想の殿堂われらが母校 一ツ橋 一ツ橋 あゝ あゝ われらが母校 (二番)」

関西学生野球連盟 (近大・同志社・立命館・関大・関学・京大) の中では立命館大学の

一校であった。

★立命館大学【昭和6年（1931年）年制定】

作詞：明本京静《明治38年3月23日生》 作曲：近衛秀麿

「かがみとうとし 天の明命 見よ わが母校 立命 立命（一番）」

「躍進日本の 輝きおへる 見よ わが母校 立命 立命（二番）」

関西六大学野球連盟（大商大・大経大・龍谷大・京産大・大院大・神院大）では大商大のみであった。

★大阪商業大学

作詞：谷岡登《明治27年12月17日生》 作曲：池内友次郎

「朝日をうけて そびえ立つ 白堊の殿堂 吾が母校（一番）」

「地の利をうけて 栄えゆく 映えある殿堂 吾が母校（二番）」

計38大学の内12大学の校歌に「母校」があった。また校歌以外の応援歌にも多数「母校」が含まれていることも分かった。校歌の制定年度は明治、大正、昭和初期までが多く、制定年度が不明の大学も大学の歴史から推測するとかなり以前から歌われていることは間違いない。作詞者は必ずしもその大学の卒業生ではないが、作詞の時点では大学を卒業している年齢であり、歌詞にある「母校」は卒業した学校の意と考えられる。しかし、これらの校歌は卒業生よりも在校生の方が歌う機会が多い。ところが、辞書に「在校している学校」と書き加えられたのは最近である。

そこで最近の新聞で「母校」を含む記事を調べてみた。

★帝京長岡、王者に肉薄 県勢初の4強入り

第98回全国高校サッカー選手権で、新潟県代表の帝京長岡は県勢初の4強入りを果たした。準決勝は1-2で惜しくも敗れたものの、前回大会王者の青森山田を脅かす大健闘だった。（中略）準決勝から一夜明けた12日、帝京長岡の選手たちが**母校**に戻ると、出迎えた浅川節雄校長がねぎらった。【2020年1月13日朝日（新潟）】

★豪雨から2年半 小野小で始業式 日田市小野地区

2017年7月の九州北部豪雨で被災した大分県日田市鈴連町の市立小野小学校で8日、3学期の始業式があった。児童らは被災後、約5キロ離れた戸山中学校の校舎で学校生活を送っていた。2年半ぶりに元の校舎に戻り、気持ちを新たにしていた。（中略）日田市教育委員会は「卒業を控えた6年生に一学期だけでも愛着のある**母校**で学校生活を送ってもらいたい」との思いから、元の校舎での授業再開を決めた。【2020年1月9日朝日（大分）】

★習志野の選手たちが関西入り 甲子園へ決意新た

101回目の夏の甲子園大会に出場する習志野の選手たちが1日、**母校**を出発。大阪府中央区の宿舎に入った。【2019年8月2日朝日（千葉）】

★金足農、母校で準優勝を報告 吉田「声援のおかげ」

第100回全国高校野球選手権記念大会で準優勝した金足農（秋田）の選手や監督ら

が 22 日夕、**母校**に戻って出迎えた学校関係者らに準優勝の報告をした。【2018 年 8 月 22 日朝日】

大半の記事は出身校の意であるが、ここにあげた記事にある「母校」は在学している学校の意と考えられる。そこで原点に戻り「母校」の「母(ぼ)」を大辞林で調べてみた。「① はは。女親。② 物を作るもとなるもの。③ 帰するところ。本拠。④ 出て来たところ。出身。」とあり、夫々の熟語が①～④別に示されている。

① はは。女親。

**ぼけい【母系】**母方から伝わる系統。母方の血筋。

**ぼし【母子】**母と子

**母性(母性)**女性が持っているとしてされている、母親としての本能や性質。又母親として子を産み育てる機能

**ぼたい【母胎】**① 母の胎内。② 発展したりわかれ出たりしたものの、もとなるもの。

**ぼどう【母堂】**他人の母を敬っていう語。母上。母君。北堂。

**ぼにゅう【母乳】**哺乳動物の母親の乳腺から分泌される白色不透明な液体。分娩後、プロラクチンの作用により出る。タンパク質・脂肪・灰分・乳糖などを含み、乳児は離乳するまでこれを主な栄養源とする。

**ぎぼ【義母】**義理の母。養母、また妻や夫の母など。

**けいぼ【継母】**父の妻であるが、実母や養母でない人。ままはは。

**じぼ【慈母】**思いやりのある、やさしい母親。また、母を敬愛してもいう。

**しゅくぼ【叔母】**父母の妹。おば。

**せいぼ【生母】**生みのはは。実母。

**そぼ【祖母】**父母の母親。ばば。おばあさん。

**はくぼ【伯母】**父母の姉。おば。

**ひぼ【悲母】**慈悲深い母。慈母。

**ふぼ【父母】**〔古くは「ぶも」とも〕ちちとはは。両親。

**ようぼ【養母】**養子に行った先の母親。また、養育してくれた義理の母。

② 物を作るもとなるもの。

**ぼいん【母音】**言語音の分類の一。声帯の振動で生じた有声の呼気が、咽頭や口腔内の通路で閉鎖や狭めをうけずに響きよく発せられる音。現代日本語の共通語ではア・イ・ウ・エ・オの五つに区分する。ぼおん。母韻。

**ぼけい【母型】**活字を鋳造する際に用いる金属製の雌型。活字の字面にあたる凸出部をつくる。製法によって、電胎(ガラ)母型・打ち込み(パンチ)母型・彫刻(ベントン)母型の三種がある。字母。

**ぼせん【母線】**① 〔数〕一つの直線の運動により、錐面・柱面・双曲放物面・一葉双曲面などが描かれるとき、おのおのの位置における直線のことをいう。② 発電

所・変電所内で、電源から生じるすべての電流を受け、また外線に分電する幹線。  
こうぼ【酵母】出芽または分裂によって繁殖する菌類で、5～10 マイクロメートルの球形または楕円形の単細胞生物。ビール酵母・葡萄酒酵母などは醸造に用いられ、パン酵母は製パン時にガスを発生させるのに利用される。酵母菌。イースト。

じぼ【字母】① ある言葉を表記するのに用いられる、すべての表音文字。梵字・ローマ字・仮名など。〔字母を音素文字に限り、音節文字である仮名をこれに含めない考え方もある〕② 「母型」に同じ。

③ 帰するところ。本拠。

ぼかん【母艦】航空機・潜水艦などの移動基地となり、兵器・食料などの補給をする軍艦。

ぼこう【母港】ある艦船が自由に出入りでき、修理・補給が十分にでき、かつ乗組員の家族が港近くに住んでいて休養ができる港。

ぼせん【母船】遠洋漁業船団の中核となる船。付属漁船の漁獲物の処理・加工・冷凍のほか、資材の補給などにあたる。

④ 出て来たところ。出身。

ぼご【母語】① ある人が幼児期に周囲の大人たち（特に母親）が話すのを聞いて最初に自然に身につけた言語。② 同じ系統に属するいくつかの言語の源にあたると考えられる言語。フランス語、イタリア語、スペイン語などに対するラテン語の類。祖語。

ぼこう【母校】その人が学び卒業した学校。出身校。また、在学している学校。

ぼこく【母国】(主として、外国に居住している人から見て)その人が生まれ育った国。祖国。故国。

「母校」は④に属しているが、例に挙げた新聞記事のように在学している学校の意となると③になるのではないか。全国大会に出場するために離れた本拠、やむを得ず避難するために離れた本拠の意で「母校」が使用されている。それなら在学している学校を「母校」呼んでも納得できる。

## 2-3 姑息

レポート第2号では「誤用を防ぐスローガン」と題して、間違っ使われている言葉について書いた。その中でも「姑息」の誤用を目や耳にすることが多い。

愛読紙「東海新報」のコラムと、人気テレビ番組での出演者の発言に誤用があったので、それぞれのホームページから指摘をした。すると、それぞれの相手側からこちらの指摘に対する反応があった。

「東海新報」の場合は、その当該のコラムに次のような記述が掲載されたのである。

★日本人と生まれたからには正しい日本語を使いたいし、どんな字でも読めるようになりたいと思っても、そうは問屋が卸してくれない。(中略)それにしても日本語は難し

い。(中略)▼先日は「姑息」の誤用について読者からメールで指摘され、この用語の出会いから何十年もの間その誤りに気付かなかった迂闊さを思った▼「姑息」をこれまでは「恥ずべき」とか「卑怯な」といったニュアンスで使っていたのだが指摘されて辞書を引くと本来は「根本的に解決することなく一時の間に合わせにすること」、「一時逃れ」などの意味だと知った▼ところがその後同じ誤用を度々目にするようになった。どうやら国語学習は「写実派」より当方のような「印象派」がはるかに多いらしい。【2019年8月15日東海新報「世迷言」】

こちらの指摘を真摯に受け止めてくれたことがわかる。他方、テレビ番組の出演者の石田氏からは、返信のメールが届いた。そこには、指摘に対する感謝のことばが連ねてあった。それに対して、改めて次のメールを送った。

★石田様

ご丁寧なメールありがとうございます。

退職後、某大学の言語文化研究所で勉強している前期高齢者です。

そんなこともありつつい余計なことをしてしまいました。

姑息は医者の世界では「姑息的治療」と本来の意味で使われているのですが、患者が聞くと不安になるので最近は使うのに気を遣うそうです。「姑息」のように本来の意とかけ離れたもの、あるいは全く逆の意で解されるものには抵抗があります。代表例では「流れに掉さず」「役不足」「情けは人のためならず」などです。

詳しくは文化庁の「国語に関する世論調査」などをご覧ください。貴サロンのご発展をお祈りしています。

すると、××氏から再びメールが届いた。そこには、「沢山の事をお教えいただき有難う存じます。余計なことなどと、とんでもないこととでございます」「竹腰様の文章には言葉に対する愛情が感じられ、また世の中の間違いを正そうとされる熱い思いも感じられ、感銘を受けております」との文言が記されていた。

「姑息」に関して誤用例が多い中で、「姑息」が本来の意味で用いられている新聞記事を見つけたので、次に紹介する。

★2段階心臓手術成功

筑波大付属病院は17日体重1,111gで生まれ、生後間もなく心不全になった女兒に対する2段階の心臓修復手術に成功したと発表した。(中略)病院によると、赤ちゃんは30代の両親の第一子で、昨年5月に院内の小児集中治療センターで生まれた。先天的に心臓に穴が開く「心室中隔欠損症」と診断された。さらに肺の動脈管が開いたままで心不全に陥ったため、体重1,100gの生後17日目に動脈をテープで絞り血流を制限する「姑息手術」をした。

内科的治療で体重が増え2,700gに達したため、10月に通常の「根治手術」を施し、心臓の中の穴をふさいだ。(後略)【2014年1月18日朝日新聞(茨城)】

### 3. コドモのための日本語塾

レポート第1号で「古典落語の裾野展望」を書いた。関西では天満天神繁昌亭に続き、神戸に喜楽館も開館、底堅い人気を維持している。修学旅行生相手に、また学校を訪問し落語会を開催する落語家の方々の努力も貢献していると思われる。

そこで次世代の日本語の担い手である子供達への日本語指導として「コドモのための日本語塾」という落語を考えてみた。

川上先生「おはようございます」

生徒全員「おはようございます」

川上先生「今日からみんな六年生。小学校最後の一年、頑張りましょう。授業を始め前に新しいお友達を紹介します。長嶋イチロー君です」

イチロー「昭和小学校から転校してきた長嶋イチローです。よろしくお願いします」

川上先生「イチロー君は何の科目が好きですか？」

イチロー「体育です」

川上先生「嫌いな科目は何ですか？」

イチロー「国語です」

川上先生「兄弟はいるの？」

イチロー「妹が一人、弟が一人いるので、一姫二太郎です」

川上先生「イチロー君。難しい言葉知っているなあ。でも残念ながら間違っている。

一姫二太郎というのは、子供を産むなら一人目の子供は女、二人目の子供は男が良いという意味です。女の子一人に男の子二人の子供三人という意味ではないから」

イチロー「わかりました。先生ありがとうございます」

川上先生「イチロー君に質問のある人いますか？はい。村山君」

村山君「イチロー君は何をしている時が好きですか？」

イチロー「落語を聞くのが好きです。昨日も家で一人テレビを見ていて爆笑しました」

川上先生「イチロー君。渋い趣味やなあ。でも爆笑も間違いや。爆笑とは大勢の人が同時に笑うこというのや」

イチロー「知りませんでした。先生ありがとうございます。これから国語を勉強します」

川上先生「イチロー君、頑張って。国語を勉強するのだったらやっぱり辞書を引くことかな。分厚いけれど五十音順に並んでいるから、言葉が探しやすい」

イチロー「先生。五十音順って何ですか？」

川上先生「そうか知らんのか。あいうえお順や。

みんなもイチロー君と仲良くして下さいね。それでは夏休み前の演劇大会の配役を発表します。主役は加山君です」

加山君「え～。僕がやるのですか？分かりました、役不足ですがみんなよろしくお

願います」

川上先生「何を言うてるのや。主役やで」

加山君 「はい。先生分かっています。役不足ですが、よろしく願いますと言っているのです」

イチロー「先生！はい！」

川上先生「イチロー君」

イチロー「加山君が間違っています」

川上先生「イチロー君。知っているのか」

イチロー「はい。昨日、パパが同じことを言うてました」

川上先生「もう君も6年生なんやから「パパ」や「お父さん」はやめとき。父と言うようにしなさい」

イチロー「はい。分かりました。昨日、父が会社でプレゼンの司会をやってくれと頼まれたそうです。その時、加山君と同じように役不足ですが、と言ったら怒られたそうです。役不足は、本人の方が上、役の方が下ということだそうです」

川上先生「その通り。力不足と間違えて使っている人が多いよや。今日は良い勉強になったな。次の時間は体育や。あれっ。天気が悪くなってきた。雨模様や」

生徒全員「やったー。中止や、中止」

川上先生「何を言う。あるぞ」

加山君 「先生。今、雨模様って言ったよ」

川上先生「また。加山君か。雨模様というのは、雨が降りそうということで、まだ降っていない。みんな早く着替えて外に出るように。福本先生の言うことをよく聞くように」

福本先生「今日は運動会に向けてリレーの練習をします。よーいドン」

福本先生「1組は残念やったな。スタートのイチロー君は早かったのに、最後の納谷君が調子悪かったな」

納谷君 「みんなごめん。イチロー君から良い流れで来たのに、流れに棹をさしてしまった」

福本先生「納谷君。本番で頑張ろう。それより「流れに棹さす」の方が問題や。流れに棹さすというのは、水の勢いに乗るように、物事が思いどおりに進むということや」

納谷君 「逆の意味で使っていました。福本先生、ありがとうございます。先生は言葉にも詳しいのですね」



川上先生「リレーはどうやった？」

納谷君「先生、ごめんなさい。僕がブレーキになり3組に負けてしまいました」

イチロー「納谷君、それは違うと思う。僕らのチームに渡されたバトン重く感じなかった？重いバトンにすり替えられていたと思う。姑息な手を使われた」

川上先生「イチロー君。そんなこと言うたらあかん。調子が悪いとそう感じる時がある。それより姑息の方が間違いや。「姑」の字の印象が悪いのかな？卑怯やずるいとの意味で使う人が多いが、間違いや。いったん休む。一呼吸おくとという意味が正しい」

イチロー「そうだったのですか。生まれてからずっと間違えて使っていました」

川上先生「おっさんみたいなこと言うな」

イチロー「先生！3組の人が、バトンに重りを付けていたと白状したそうです」

川上先生「そうか。よっぽど勝ちたかったのや」

イチロー「頭にきたから、殴りに行きます」

川上先生「やめなさい。向こうも反省している。心を広くして許してやりなさい」

イチロー「先生。情けは人のためならずと言います。本人のためにならないです」

川上先生「それも違うな。正しくは人に情けをかけるとそれが巡り巡って自分の為になるということや。転校してきてから色々国語の勉強になったな。年末の全国一斉テストに向けて皆勉強頑張ってください」

イチロー「ただいま」

父「お帰り。イチロー。試験の結果はどうやった？よう勉強していたからトップ合格やろ」

イチロー「あかんかった。二位やった」

父「何でやねん？辞書をよう見ていたやないか」

イチロー「見過ぎたので次点（辞典）やった」

#### 4. まとめ

武庫川女子大学 言語文化研究所にお世話になって8年が経過、その間、日本語について色々な角度から勉強してきた。だからこそ「処方せん」「母校」「姑息」などの言葉に立ち止まった。

日本語を学べば学ぶほど、その美しさに魅了される。背景にあるのは、四季の移ろいととも姿を変える日本の風景であろう。つつい忙しさに感けて、ひと昔前は新聞に、最近ではスマートホンの画面に目をやり、車窓に目を向けることを忘れていた。見慣れた風景もよく見ると変化している。細かな変化を伝えるには、語彙が豊富な日本語が最適だ。手許にある歳時記を見て再認識した。

住吉大社を訪れると必ず立ち寄る場所がある。「住吉に歌の神あり初詣」の句碑である。作者の大橋櫻坡子は高濱虚子の弟子で、私の祖父でもあり、句碑の除幕式では孫として幕を引いた。人生の前半にその祖父から言葉を学び、人生の後半に佐竹先生、岸本先生から言葉を学ぶ幸せに感謝する。そして、また一年頑張る意欲が湧いてきた。

新型コロナウイルスで沈みがちな令和初めての春、次の俳句でこのレポートを締めくくる。

春風や闘志抱きて丘に立つ 高濱 虚子



≪記録≫

開講場所：武庫川女子大学言語文化研究所 研究所棟 I-609

開講日時：

第1回 2019年5月25日(土)  
10時30分～12時30分



第2回 2019年7月13日(土)  
10時30分～12時30分



第3回 2019年10月5日(土)  
10時30分～12時30分



第4回 2019年12月24日(土)  
10時30分～12時30分



第5回 2020年2月1日(土)  
10時30分～12時30分



企画・開催 佐竹秀雄（本研究所研究員） 岸本千秋（本研究所助教）  
レポート指導 佐竹秀雄 岸本千秋  
開催補助 向井弥生（本研究所職員）

---

オトナのための日本語塾  
レポート集 2019

刊行 2020年3月31日  
編集 佐竹秀雄 岸本千秋  
〒663-8558 兵庫県西宮市池開町 6-46  
武庫川女子大学言語文化研究所  
電話 0798(45)3536  
FAX 0798(45)3574  
Mail ilc@mukogawa-u.ac.jp  
URL <https://www.mukogawa-u.ac.jp/~ILC/>  
発行 武庫川女子大学言語文化研究所  
印刷 大和出版印刷株式会社

---